益子町の魅力は「陶器市だけじゃない」

地元と東京の高校生がアイデア

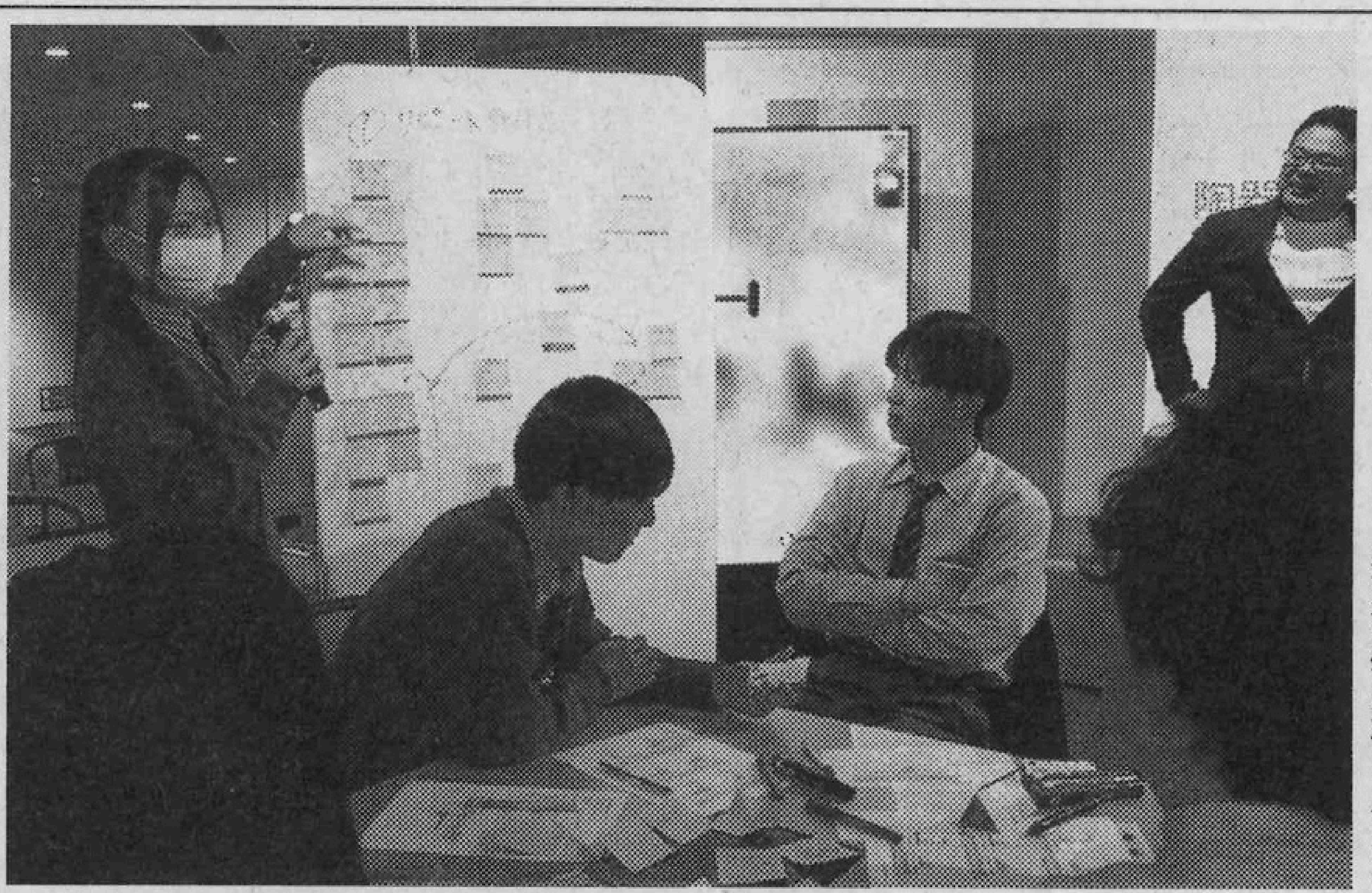
栃木・益子の課題解決WS

益子焼で知られる「陶芸のまち」、栃木県益子町にある県立益子芳星高校の生徒たちが、積極的に地域に関わる活動に取り組んでいる。同町には、春秋の陶器市に大勢の観光客が集中するが、それ以外の期間との差が大きいという長年の課題がある。生徒たちはこのほど、東京の高校生と一緒にこの課題を考えるワークショップに参加し、意見を出し合った。どんなアイデアが飛び出したのか。

■陶器市のオーバーツーリズム、観光客の集中が課題に

ワークショップのテーマは「陶器市来訪者が益子町にリピートするには」。2024年12月23日、渋谷駅直結ビルにある共創施設「SHIBUYA QWS（渋谷キューズ）」（東京都渋谷区）で開かれ、益子芳星高校の生徒20人と、益子町と交流がある東京都大田区の日本体育大学荏原高校の生徒18人が参加した。

益子芳星高校は、陶器市や町内幼稚園でのボランティア、「ましこ未来大学」といった地域活性化への取り組みに大勢の生徒が参加し、地域連携に取り組んでいる。一方、日体大荏原高校は探究学習のテーマの一つとして益子町の地域課題を学んでおり、24年9月、同町と包括連携協定を締結した。



……………

ワークショップで話し合った結果を発表する生徒＝撮影：水野拓昌

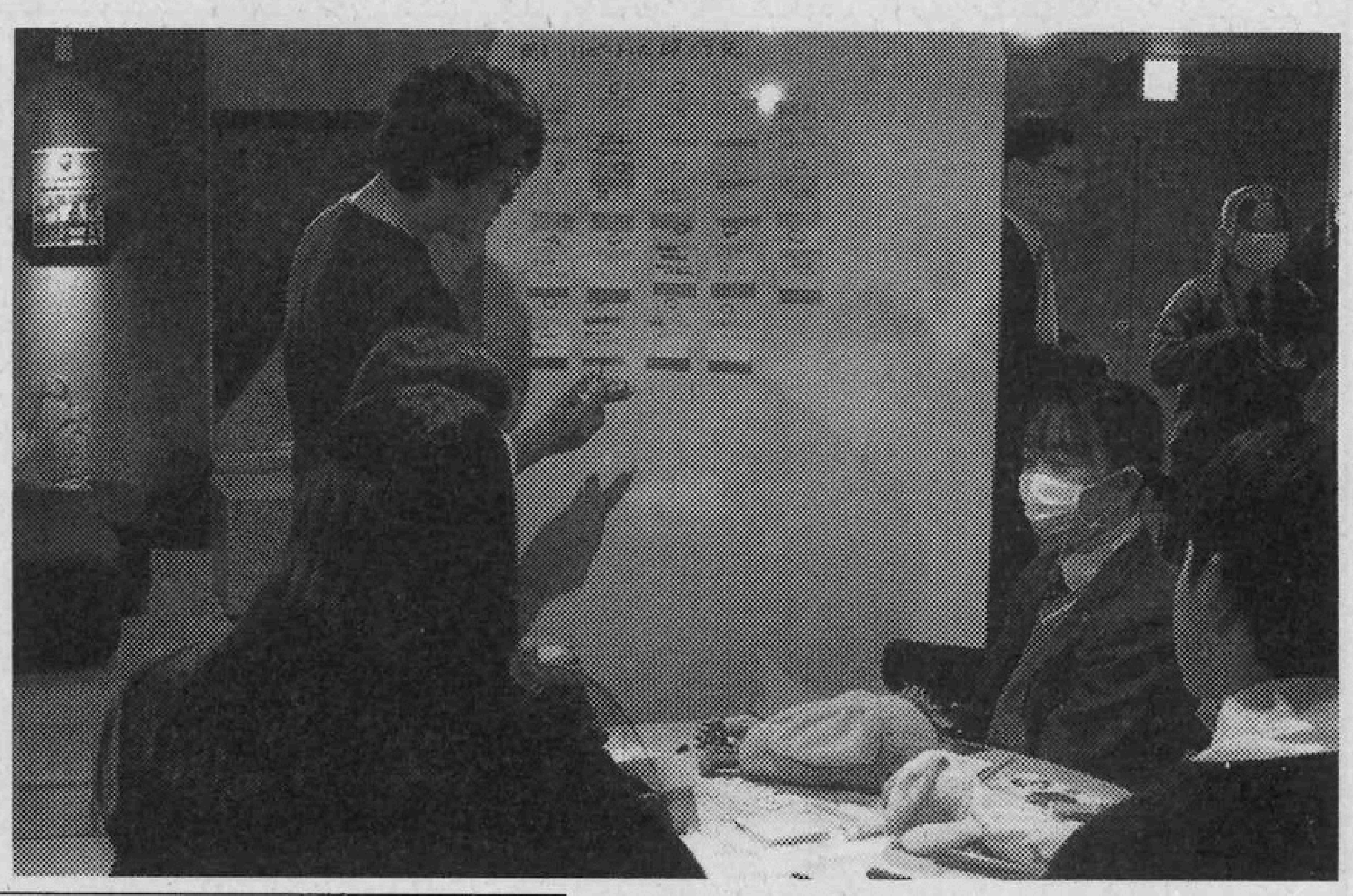
ワークショップで挙がった課題は、陶器市でのオーバーツーリズムや、年間を通しての観光平準化だ。同町では年2回「益子陶器市」が開かれ、約600ものテントが並んで地元陶芸作家らが作品を販売する。栃木県内有数の観光イベントで、春秋合わせて約60万人、春の陶器市だけでも9日間程度の期間に町人口の19倍ほどの約40万人が訪れる。町の年間観光客数は約250万人で、その4分の1近くが春秋合わせて13～14日間の短期間に集中する。

こうした課題を踏まえ、ワークショップでは7グループに分かれて討議。①リピートした旅行先、また行きたい旅行先はどんな点が良かったか②普段の益子町のお薦めポイント、リピートしたくなる工夫は何か③陶器市を活用して町をPRするにはどうすればよいか――といった視点で意見を出し合った。各グループには、両校生徒に渋谷キューズ会員企業のビジネスマンらが加わり、ほとんどが初対面。それでも、ホワイトボードを使って意見を出し合い、予定時間を超えて議論が白熱した。

■「プレミアム陶器市」「サブスク型陶芸体験」など多くのアイデア

各グループが披露したアイデアはさまざまだが、具体的でユニークな提案も多かった。

あえて来場数を抽選で絞り込む「プレミアム陶器市」や窯で焼きあげることも含めて1日だけでは終わらない「サブスク型陶芸体験」「年間を通した陶芸体験」などの提案があった。また、自然豊かで懐かしい景観にも恵まれた同町の特長を生かし、有名アニメ作品関連のテーマパークやスポーツとのコラボレーション、「キャンプと農業体験・野菜収穫をセットにし、その野菜を調理して益子焼の器で食べる」といったアイデアも披露された。



ホワイトボードを使ったワークショップ＝撮影：水野拓昌

……………

「（広田茂十郎）町長にTikTok（ティックトック）でバズってもらいたい」、「（同町出身のタレント）井上咲楽さんとコラボしてほしい」といった声も。町では今後、こうしたアイデアの実現性などを検討していく。

益子芳星高校3年の磯田有沙さんは「都会に住んでいる高校生と価値観、考え方の違いで新たな発見があり、社会人の方から話のまとめ方も勉強できた。今後、社会人になる上で役立てていきたい」と話し、日体大荏原高校3年の中村初樹さんは「貴重な経験だった。探究学習の授業では益子町を調べてプレゼンテーションもしたが、その時とは違った課題でアイデアを出した」と振り返った。

生徒たちの発表を見守った益子芳星高校の宇都木修一校長は「生徒たちにとって価値のある取り組み。提案の中で一つでも実現できるものがあれば、自信にもつながる」と取り組みへの手応えを示した。

小学校の小規模校化に対応

次世代リーダー教員を養成

鳴門教育大学と徳島県教育委員会が連携

地域の課題となっている小学校の小規模校化などに対応できる次世代リーダー教員を養成するため、鳴門教育大学と徳島県教育委員会はこのほど、同大の2027年度入試（26年度実施）から「地域教員希望枠」を導入すると発表した。。同県内の小学校では単学級校が増加しており、今後は学校間連携を推進する力などを持つ人材が必要になる。学部4年間と教職大学院3年間の7年一貫型で、同県の未来の教育を担う教員を安定的・継続的に育成していく。

全国的に少子化が進む中、同県では13年度から22年度の10年間で小学校に在籍する児童数は約12%減り、30年度には現在の児童数からさらに19・5%減となることが予測されている。また、県内の小学校では単学級校が増加しており、24年度の39校から31年度には56校に増える見通しだ。

こうした状況を踏まえ、県内のさまざまな課題への対応力を持ち、学校間連携を推進し学校力を強化できる若手リーダー教師を養成しようと、同大と同県教委が連携し、地域教員希望枠「徳島スーパールーキー教員養成プログラム」を開設する。

地域教員希望枠は、県内のみならず県外からも出願可能とし、入学定員は5人。出願資格を得るには、高校段階から同学が主催する高校生向けのセミナー「徳島で輝く先生になる！鳴教プロジェクト」（仮称）を修了する必要がある。同セミナーは県外の高校生も受講できるよう、オンラインやオンデマンドなども検討されている。

27年度入学生からは、同プログラムの特設科目群として「徳島県中核教員養成科目群」を設定。

教職に対する
指導力、生徒
った基盤的な
え、▽教師と
に学ぶ力・ス
模化する学校
維持・強化に
てを探究して
CTの活用な
校間連携を構
きる力▽リー
して教員集団
テートする能
つの力量育成

また、教職
目には同県教
を受け、2年
教員として学
務し、3年目
けながら大学
システムなど
学修し、専門
得するとして
採用試験時に
などが検討さ

鳴門教育大
整役・牧野浩
学校の小規模
も進んでいく
まえ、どうい
要かを県教委
し、地域教員
入することと
模校において
を図っていく
ーション力や
越えてさまざ
とつながって
ICT活用力
県の未来の教
世代リーダー
的・持続的に
く」と意気込

9回

やりがい

業も大事だけど、自分の夢を
諦めない方がいい」との意見
ールフォアワン」と言
すが、学校では「ワン